

# 近代ギリシャの学術誌『ヘルメス・オ・ロギオス』に見られる医学研究

菅野 幸子, 本田 克也

筑波大学 医学医療系 法医学

## はじめに

『ヘルメス・オ・ロギオス』(Ερμής ο Λόγιος, Hermes the Scholar)は、ギリシャ独立戦争以前の、ギリシャ啓蒙期(1811-1821)に発刊された最も重要な学術誌である。近代ギリシャは、400年あまりに亘ってオスマントルコの支配下に置かれており、その間、文化的・知的活動は全般的にかなりの停滞を余儀なくされた。古代ギリシャの遺産は、専ら西ヨーロッパ諸国での継承・発展がなされており、ギリシャはその後を追うようにしてルネサンス(西ヨーロッパ諸国からのギリシャ文化の逆輸入)を経て、近代化への道を歩むことになる。この近代化の推進に当たっては、主として在外ギリシャ人の力によるところが大きかった。すなわち、オスマントルコの支配から脱するためにも、彼等は西ヨーロッパ諸国の先進技術や知識を、主としてイタリア、フランス、オーストリアなどの諸大学に留学することで取り入れていったのである。

『ヘルメス・オ・ロギオス』の正式名称は Ερμής ο Λόγιος ή Φιλολογικαί Αγγελίαι (ヘルメス・オ・ロギオス・イ・フィロロギカイ・アングリアイ<sup>1)</sup>, Hermes the Scholar or Philological Reports)である。本誌は、独立運動の気運が高まるさなかに、西ヨーロッパ諸国に移住したギリシャ知識人のコミュニティによって、ギリシャ本国との精神的結束を強めていくための一手段として、ウィーンで発刊された。ギリシャ人自身の手で、それも外国語ではなく、自分たちの言語である近代ギリシャ語の定期行物を出版することは、当時としてはまさに記念すべきことだったのである。発起人は

パリ在住のアダマンティオス・コライス(Αδαμαντιός Κοραΐς, 1748-1833)である。コライスは、ギリシャの文芸復興に貢献した中心人物として近代ギリシャ史に名を残している。彼はモンペリエ大学にて医学を学び、その後は主として西洋古典文献学についての論文執筆などを多数行なった。『ヒポクラテス全集』の「空気・水・場所について」の校訂本 *Ἱπποκράτους, Το περὶ ἀέρων, ὑδάτων, τόπων* (Paris, 1816)を出版したことも知られる。

本稿では、『ヘルメス・オ・ロギオス』の中の主要論文について取り上げてみたい。



図1 Ερμής ο Λόγιος  
(ヘルメス・オ・ロギオス)



図2 Αδαμαντίος Κοραΐς  
アダムантиオス・コライス (1748-1833)

『ヘルメス・オ・ロギオス』は、特定の専門分野についての研究雑誌ではなく、総合的な学術誌として発刊された。近代史上、初めてギリシャ人自身の手で発刊された実に画期的な雑誌である。本誌発刊の目的は、ギリシャ人の民族意識を高めて知的活動を促進することであり、このことは独立運動にもその精神的支柱としてかなりの影響力を及ぼすことになった。本誌の内容は大別して二つである。一つは、古代ギリシャの言語・歴史・諸科学に関する研究であり、二つは、近代における最新の知見の紹介（諸科学における発明・発見・新理論等々）と、それをふまえてのギリシャ人による研究である。本誌の出版に当たっては、途中で財政難に陥った時期もあるものの、ほぼ月に2回のペースで定期的に刊行されていた。革命以前においては最も長期に亘って存続した雑誌であり<sup>2)</sup>、ギリシャの医学史家の間では、近代ギリシャ医学史の特徴を見る上で極めて重要視されている史料の一つである。

本誌で扱われている分野は、実に多岐に亘っている。まずかなりの割合を占めるのが文献案内で

ある。ここには、様々な領域についての、主として西ヨーロッパ諸国で出版された文献が紹介されている。

また、掲載論文については、以下の分野のものが挙げられる。

教育、社会、言語学、自然科学・医学、論証法、歴史、文学、考古学、芸術、哲学、経済学、地理学、その他。

上記のうち医学論文は、全体の1割を占める。この割合は決して少なくないと医学史家カラベロプウロス<sup>3)</sup>は指摘する。以下に本誌に掲載された主要医学論文を紹介しておこう。内容的には大別して以下の4つである。

### (1) 解剖学・生理学

代表的なものとしては、ディミトリオス・ニズー著「汝自身を知れ、人間の自然史」(Γνώθι σαυτόν. Φυσική ιστορία του ανθρώπου, 1817)が挙げられる。ニズーは、イタリアのピサ大学医学部に留学して、学位取得した後に、主としてフランスで医療活動・執筆活動に従事した。本論文は、解剖学、生理学の内容が主たるものであり、神経学、骨学について、また病理学の記載も含まれる。1800年初頭においては、現代ギリシャ語での医学書・医学論文はまだ数少なかったこともあり、医学用語も外国語の名称をそのまま用いているケースも少なくない。論文数が増えていくのに伴って、現代ギリシャ語での医学用語がしだいに規定されていくようになる。本論文でも、いまだ骨の名称について、一部フランス語での記載がみられる。

### (2) 乳幼児への予防接種と養育

この時代の極めて重要な医療技術の一つである予防接種については、エドワード・ジェンナーの種痘法についての紹介が、1812年に掲載された(アンゲロス・メリッシノス「乳牛の痘瘡」αγγελιδινή ευλογιά)。本論文では、イタリアで400万人の児童が牛痘を接種して効果を挙げたことが記載されており、ギリシャ本国でもできる限り早い時期の開始を促している。西欧諸国に比べて全

般的に医療の遅れがみられたギリシャでは、本誌に掲載された論文は、ギリシャ国内での医療活動を啓発・改善することにも大いに役立った。

またその他にも小児医療に関しては、ウィーン大学医学部に留学して学位を取得したΠ.イピティスによる「子供の養育」(Ανατροφή των παιδίων, 1816)などが挙げられる。本論文では、妊娠・出産・産褥期が扱われており、またとりわけ乳児に関しては母乳の重要性が説かれている。すなわち、動物の乳よりは母乳の方が栄養学的にも優れていること、そして乳母よりも実の母親の母乳の方が、母子関係を安定的で良好なものにするためにもよいと、栄養学的観点のみならず、精神的な側面からも強く勧められている点が特徴である。

### (3) 医学の歴史について

アポストロス・アルキサス「医療史の概略報告」(Εκθεσις συνοπτική της ιατρικής ιστορίας, 1813)本論文は古代医療史がテーマであり、古代ギリシャ、エジプト、ユダヤ、インドの医療について紹介されている。古代ギリシャの医療は、西欧医学の源泉という側面のみならず、オリエント医療との共通性、オリエントから継承した部分も多く、この点を抜きにしては古代ギリシャ医療を十分に理解することはできないというのが筆者の主張であり、広く比較研究を試みたものとして画期的な論文であった。こうした医療史の研究については、Kurt SprengelやH.F. Linkらの諸論文に啓発された面も大きい。

### (4) 医師活動と道徳哲学(倫理)について

次に挙げるべきは、医療倫理についての論考である。倫理に関しては、イタリアやフランスにおける研究を紹介しつつも(すなわち西欧諸国を媒介にしつつも)、基調としては古代ギリシャ医療に貫かれる倫理的伝統を重んじる傾向が強くみられる。一例を挙げれば1820年に『ヘルメス・オ・ロギオス』に掲載された論文「医療哲学—医師の道徳哲学」(Ιατρική φιλοσοφία- ηθική φιλοσοφία του ιατρού)においては、医師とはどうあるべきかがおよそ以下のように説かれている。

すなわち、医師はかつて哲学者(フィロソフォス)とも呼ばれていたことから、本来、いかなるときも正しい理性に基づいて正確に判断を下す能力が求められること。医術については最大限の努力をもって修得し、注意深く用いること。礼節を重んじ、他人の意見に惑わされない自立した精神を保つこと、何より医術を用いるに際しての厳格さが求められる、ということが強調されている。

この論文において注目されるべきは、医療倫理の原点である「ヒポクラテスの誓い」を土台として、アレタイオス、ガレノスの医学思想が盛り込まれていることである。Guil.de Baillou, Th. Sydenham, Giorgio Bagliviらの見解についても、それらがいかに古代ギリシャの医学思想に影響を受けているかということを近代ギリシャ人は認識した上で、(西欧を媒介にして逆にそこから)古代ギリシャの医療倫理の意義を再認識させられたことが大きな特徴である。ギリシャ文化の逆輸入ということが、『ヘルメス・オ・ロギオス』を通して、医学の分野においても顕著にみられることが興味深い。

## 結語

独立戦争直前期の近代ギリシャで発刊された学術誌『ヘルメス・オ・ロギオス』には、積極的に西欧医学の知見を取り入れる努力がみられる。また単に諸外国のものを学ぶのみならず、それをすべて本国語すなわち現代ギリシャ語に翻訳して、ギリシャ本国の人々にも普及させようとする積極的な動きがみられた。ヒポクラテスなど、古代の文化遺産の継承も同時に見られる。

## 注

- 1) 現代ギリシャ語の発音では、ヘルメスはエルミスとなるが、ここではギリシャ神話で通常日本語ではヘルメスと呼ばれていることから、上記のように記した。ヘルメスは商業、交通の神として知られるが、ここでは古代ギリシャ以来の知恵(ソフィア)を、ギリシャ国外・国内の間で媒介し、活発な交通関係においていくことで、ギリシャ文化をギリシャ人自身の手で継承、発展させようとする願いを込めて命名された。

2) 『ヘルメス・オ・ロギオス』以外に、当時刊行されていた学術雑誌としては、『エリニコス・ティレグラフオス』(Ελληνικός Τηλέγραφος, ウィーン, 1812–1821), 『フィロロギコス・ティレグラフオス』(Φιλολογικός Τηλέγραφος, ウィーン, 1817–1821), 『アテナ』(Αθηνά, パリ, 1819), 『メリッサ』(Μέλισσα, パリ, 1819–1821), 『ムーセイオン』(Μουσείον, パリ, 1819) などがある。

## 参考文献

- Καραμπερόπουλος Δ. «Ο Ιπποκράτης στα ιατρικά κείμενα του Νεοελληνικού Διαφωτισμού». Η Ιπποκρατική Ηθική και Σύγχρονες Εξελεύσεις. 2006. pp. 28–41.
- Καραμπερόπουλος Δ. Η Ιατρική Ευρωπαϊκή Γνώση στον Ελληνικό Χώρο 1745–1821 (The Medical European Knowledge in the Greek Region 1745–1821), Athens, 2003.
- Ματζολίη, Janssen. “The Greek pre-revolutionary discourse as reflected in the periodical Ερμής ο Λόγιος (1811–1821)” *Cultural nationalism in the Balkans during the nineteenth century*. 2010.